

『大和物語』初段の史実的和歌解釈と初段の意味するもの

山崎 正伸

『大和物語』初段は、宇多帝讓位にまつわる歌語りであるが、『後撰和歌集』・『伊勢集』・『寛平御集』・『亭子院御集』・『古今六帖』・『大鏡』にも作者や歌詞が異なった形でとられている。『亭子院御集』については、既に柿本獎氏が、「詠み人が、初めの歌は宇多帝、後の歌は醍醐帝になって、大きい異伝の如くであるが、歌の内容は両帝に全然ふさわしくなく、誤伝たる事は明瞭である。」⁽¹⁾と説かれるとおり誤伝とされるべきものであろう。また、同様に柿本氏が誤伝とされる『古今六帖』・『大鏡』も除外して差し支えあるまい。この除外した以外の資料を列举すると、

『大和物語』初段

亭子のみかどいまはおりゐたまひなんとするころ、弘徽殿のかべに、伊勢のごのかきつけゝる、
わかるれどあひもおしまぬもゝしきを見ざらむことのなにかゝなしき
とありければ、みかど御覽じて、そのかたはらにかきつけさせたまうける、
身ひとつにあらぬばかりをゝしなべてゆきかへりてもなどか見ざらむ
となむありける。⁽²⁾

『後撰和歌集』卷第十九・離別

『大和物語』初段の史実的和歌解釈と初段の意味するもの

亭子のみかどおりゐたまうける秋、弘徽殿のかべにかきつけける 伊勢

一三三二わかるれどあひもをしまぬもしきを見ざらん事やなにかかなしき

みかど御覧じて御返し

一三三三身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなとかみざらん⁽³⁾

『伊勢集』

亭子のみかどのおりさせたまはむとせさせたまひし時の秋

二三八白露のおきてかかれるももしきのうつろふあきのことぞかなしき

二三九わかるれどあひもおもはぬもしきを見ざらんことのなにかかなしき

と、こき殿のかべにかきたるを、みかど御覧じて、かたはらに

二四〇みひとつにあらぬばかりぞおしなべてゆきかへりてもなとかみざらん

『寛平御集』

おりさせたまはむとてのころ、弘徽殿のかべに、伊勢がかきつけたりける

一六わかるれどあひもおもはぬもしきを見ざらん事やなにかかなしき

後に御覧じて、かべにかかせたまける

一七身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりてもなとかみざらん

とあって、これらを通覧すると、『後撰集』のみが、「みかど御覧じて御返し」と、取り交わされた贈答歌ではないが、前歌詠者に対する答歌として、両者が交流するように読む仕組みとなっている。それは、前者伊勢詠歌に書き加えた後者宇多帝詠が、前者に対するなんらかの回答になっているからにほかならない。詠歌状況については、柿本氏が「他書の所伝を点検したが、本段と相違する点のある『亭子院御集』、『代々御集』中の『亭子院御集』、『古今六帖』、『大鏡』の一説、『伊勢集』

のいずれの伝えよりも、本段の伝えは安定していると言えよう。⁽⁴⁾とされるように、『大和物語』がそのことをよく伝えてい
るものと考えられよう。この『大和物語』初段の和歌の解釈については、既に、塚原鉄雄氏⁽⁵⁾や、工藤重矩氏⁽⁶⁾・今野厚子氏⁽⁷⁾が
論究されているが、どちらも語彙変移や異伝派生という視点での論究で、本論では初段和歌の解釈とその根拠となる史実的
な観点から論究したい。この二首は、異なった作品における相違だけでなく、『大和物語』の注釈に限っても様々な解釈が
提出されている。これらを再検証する上で成立出版年次順に並べると、

	伊勢詠歌	宇多詠歌
1	おしまれぬ身なれば又もも、敷をみさらむはなによりかなしきと也	行めくりてもなとかみさらむと伊勢か歌の心をあはれませ給也
2	歌の心はもゝしきはいせともろ心にはあらでわかれん事を何とも思ふまじきをわれのみいかでかく名残のおしきぞと也おりるさせ給へばいもともに禁中をまかづる事を思ひてよみ給し	天子は亭子御一人斗にもあらねは猶なべての帝にも仕へまつりて禁中を見奉れとの御製にや
3	こゝろはおりるさせ給はゞいせも同じくまかでぬべきなごりを思ひてあひも思はぬなどよめるかあはれなりやとよみませる也	すめらぎはわれ御一人ばかりにもあらねばまかづるとても又行廻り参りてなべての帝にも仕へまつりて内わたりをも見ざらん
4	帝おりるさせ給へは我も内裏を退出すへければ名残をおしみてよめる也我はかくなこりおしく思へとも内裏は無心にして我まかつるをおしむ	身とは御みつから玉体をさしてよみ給へり帝は御身のみにもあらすつきくもまします事なれはをしなへて宮つかへし奉り内裏を見奉れとの御製也

<p>心も有へからすされはあひもおしまぬもゝしき や然るを何とてさのみ見さらん事のかなしきそ やさはあるましきものなれとも年頃住みなれし なこりはせんかたなく悲しきとの心也無情の物 に対して心あるやうによむ此道のならひ也</p>	
<p>5</p>	<p>身ひとつに我身ひとつには在し如くにもあらぬ計よそこなどは後 のみかにつかへまつりてもなとかみさらむとよませ給へる也古 注ははかりといふ事を心えかねたり二の句のを文字はかくよくに かよふを文字也</p>
<p>6</p>	<p>帝は私一人ではないのだから、同様に考えて、今後も宮中にたち かえって暮すがよからう。</p>
<p>7</p>	<p>私一人にとっては、今まで通りではないというだけのことなのだ から、お前はこれからも同様に、行き来して内裏を見ることがど うしてなからう。(悲しむにはあたらないことだ)</p>
<p>8</p>	<p>帝が譲位なされば、私もお伴をしてこの内裏と 別れるのだが、私がなごりを惜しんでゐる程に は、この無心な内裏は同じ思ひで私の退出を惜 しんでくれる様子もない。そんな内裏を見なく</p>

13	12	11	10	9	
<p>帝の譲位により温子に従って宮中を去るに当って、宮中そのものには何の未練もないのに、なる</p>		<p>しいのでございましょう。</p>	<p>のでしょうか。</p>	<p>なる事が、どうしてかう悲しいのだろう。</p>	
<p>帝の譲位により温子に従って宮中を去るに当って、宮中そのものには何の未練もないのに、なる</p>	<p>見るであろう。</p>	<p>宮中で暮す事がどうして無いであろう。</p>	<p>我が身一人だけの宮中ではないのに、どうしてそのようなことをいうのだ。もっと普通にあの人やこの人にお仕えして宮中を見ることをどうしてしないのだ。</p>	<p>帝は、私一人にかぎったことではないのだから、私とおなじように思っ、これからの帝に、つぎつぎに仕えれば、どうして宮中を見るができないということがあろうか。</p>	
<p>（宮廷を離れゆく）悲しい身の上は、何もお前一人だけではない（他にも同じ運命の人がいる）のだから、（退位後は）その人々</p>	<p>「退位した」我身のみに「再び百敷を見ることが」ないだけだ私以外の者は皆一様に、たとえ一度は退出してもまた帰って来て百敷を見ることが、どうしてなからうか、きっとまた百敷を見るであろう。</p>	<p>そなたの仕えるのは、わたし一人に限らぬものを……、いったん宮中を去っても、またもどって来て、わたし同様、新帝に仕え、</p>			

<p>ぜか別れが悲しい。それは皇子まで為した帝との別れが悲しいのだ。</p>	<p>を訪れてまた会うこともあろう（そう悲しみなさるな）。</p>
<p>14 私は別れて行きますが、（私が思うほどには）なごり惜しいとも思ってくれない内裏を、二度と見ることはないだろうと思うと、どうしてうも悲しいのでしょうか。</p>	<p>御代がわりして宮中を去るのは、私一人だけではない（お前たちも去る）のだから、（別の居所に移る今後も）これまでと同様に私のもとに出入りして、私に逢えないことはないのだ。</p>

(8)

となる。以上を通覧すると、宇多帝詠の「身ひとつにあらぬばかりをしなべてゆきかへりてもなどか見ざらむ」の、「身ひとつ」「ばかりをしなべて」「などか見ざらむ」のそれぞれに異なった解釈がみられる。以上を整理すると、「身ひとつ」の解釈には、自己宇多帝と対象者伊勢の二通りがあつて、「ばかりをしなべて」については、「ばかり」は限定の意に統一されるものの、「を」が間投助詞として口語訳されるものと、接続助詞として口語訳されているものと二通りある。また、「をしなべて」は、「どの天皇に仕えてでも」というものの、状況は明示されないで「これまでと同様に宮中に行き来して」というものの、「これまでと同様に私宇多帝のもとに出入りして」というものと、「皆はひとしく退出しても帰って来て」というものの、「ひとしく皆にお仕えして」というものの、「皆を訪れて」というものがある。また、「などか見ざらむ」という見る対象「もしき」も、「私宇多帝」とするものと、「宮中」とするものというように、一首の解釈に多種多様の解釈が存在する。

「身ひとつ」については、既に工藤氏が、『身一つ』は自分だけが皆と違うことを強調するのであり、『おしなべては』自分以外の全てを一括した言い方である。この表現からはとりたてて伊勢個人を意識したものとは言わない。むしろ、個人としては意識されていないのである。⁹⁾と説かれるとおりで、「をしなべて」と対比した条件で考えなければならない。そうしても、これまでの解釈を見ると、「おしなべて」「考えて」と「考えて」の省略として、自分宇多だけでなくどの天皇も一

様に考えてというのと、「おしなべてゆきかへる」と、皆一様というものがある。後述するが、ここは宇多帝を除いた皆といっても、弘徽殿の温子を中心として温子とともに弘徽殿に存在した多くの女房達が一様に、と考えるべきであろう。「ばかりを」については、大木正義氏が、『ばかり』が限定の意味を持つとする解は『ひとつ』と『ばかり』が重複していると(10)いう点を十分説明する必要も生ずる。(従来の考えはこの点の説明がない。)(11)と指摘される。私案では、「身一つ」の「ひとつ」は、「もしき」即ち宮中において、宇多帝のみという限定、そして「ばかり」は、これまでの状況と譲位以後の状況が異なるだけと、連体形を受けて場の変化に限定するものと考ええる。「私」一人のみにとって、「これまでと異なるだけ」で、「皆」にとっては、「これまでと異なる」という対応になる。「身一つにあらぬばかりを」は、私の身(宇多帝)のみにとってと、自己に限定し他者を排除する。そして、これまでと状況が違っただけだと、宮中別離を限定し、他者の同一状況を回避する。その上で、「などか見ざらむ」と、「百敷・宮中殿舎をどうして見なかつ、きっと見るだろう」と、応じているのである。もとより、伊勢の惜別の思いは、単純に再度後宮を見ることを希求するのではないが、伊勢詠歌の心情を理解しながらも詠歌表面に答えることで、感情のズラシを生み、なだめすかことができる。相手の悲しさの深層を理解しながらも、それを表面上では解消するのが宇多詠歌である。勿論、以前と異なる状況においては、宮中を見てもなんら伊勢の悲しみの本質は解消されるべくもない。ここで一応私案の口語訳を提示しよう。

私一人の身のみにとって(状況が)違っただけなのだよ。皆ひとしく行き戻ってもどうして宮中を見なかつ、きっと見るだろう。

と口語訳されよう。口語訳としては、工藤氏以後の解釈ではなく、工藤氏の解釈が正鵠を得ているものである。ここまでは、言葉の解釈に留めておいたが、歴史的な事実によってこの歌の解釈の裏付けを考えてみよう。

これまでの解釈は、『踐祚部類鈔』の、醍醐天皇の条に、

寛平九年七月三日丙子、受禪。新注清涼殿。旧注弘徽殿。

とあって、讓位の儀式の折の宇多帝の御在所が弘徽殿とあることを根拠に、伊勢が弘徽殿の壁に詠歌を書いたのは、宇多帝に向けての伊勢のメッセージとして読むことに拘泥している。弘徽殿という場が合致する故に、あまりにも讓位の折りの伊勢と宇多帝を強く意識し過ぎて解釈しているように思われる。温子は、『日本紀略』の延喜七年（九〇七）六月七日の条に、「皇太夫人藤原朝臣温子崩。」とあって、皇太夫人となつてゐることが知られる。この皇太夫人について温子前後の記事を拾いだすと、

藤原順子○甲子。帝即^二位於大極殿^一。（中略）策命曰。（中略）凡人子^乃蒙^レ福^乃久^欲為^留事^被於夜^乃多米^{爾止奈母}聞行^須。故是以親母藤原氏^乎。皇太夫人^{爾上奉}利治奉^流。（『文德実録』嘉祥三年四月十七日）

藤原明子○廿九日丁巳。諸衛鎧甲嚴^レ警。皇太子與^二皇太夫人^一。同輿遷^二御東宮^一。儀同^三行幸^一。但不^二警蹕^一。先是廿七日。奉^レ迎^二太夫人於東五条宮^一。欲^レ令^レ擁^レ護幼冲太子^二也^一。（『三代実録』天安二年八月）

○七日甲子。天皇即^二位於大極殿^一。時年九歲。詔曰。（中略）凡人子^乃蒙^レ福^乃久^欲為^留事^被於夜^乃多米^{爾止奈}聞行^須。故是以親親母藤原氏^乎太夫人^{爾上奉}利治奉^流。（『三代実録』天安二年十一月）

藤原高子○三日乙亥。天皇即^二位於豐樂殿^一。詔曰。（中略）凡人子^乃蒙^レ福^乃久^欲為^留事^被於夜^乃多米^{爾止奈}聞行^須。故是以朕親母藤原氏^乎皇太夫人^{爾上奉}利治奉^流。（『三代実録』元慶元年正月）

班子女王○十七日戊午。（中略）女諱班子。光孝天皇龍潛之日。納^二之藩邸^一。生^二朱雀太上天皇^一。天皇踐祚之日。尊為^二皇太夫人^一。（『三代実録』貞觀九年正月）

○十七日丙戌。（中略）天皇即^二位於大極殿^一。以^{親母王氏}為^二皇太夫人^一。申刻。還^二東宮^一。

○以^二先皇皇太夫人班子女王^一為^二皇太后^一。（『日本紀略』仁和三年十一月）
（『日本紀略』寛平九年七月廿六日）

藤原温子○從三位藤原朝臣温子為^二皇后^一。即日任^二職官^一。皇后今夜出^二内裏^一。移^二御於東五条堀河院^一。

○四月廿五日甲子。中宮自^(東)二・五条宮遷御於朱雀院。

○八月廿八日。中宮自^(東)朱雀院遷御東七条宮。

○七日壬子。皇太夫人藤原朝臣温子崩。年卅六。号^(東)七条皇后。天皇之繼母。又養母也。有警固事。

〔日本紀略〕寛平九年七月廿六日

〔日本紀略〕昌泰元年四月二五日

〔日本紀略〕延喜三年八月廿八日

〔日本紀略〕延喜七年六月

藤原穩子○廿六日庚午。以女御從三位藤原朝臣穩子為中宮。前皇太子之母也。

〔日本紀略〕延長元年四月

○廿八日辛亥。詔。尊^(隱子)儀皇后為皇太后。

〔日本紀略〕承平元年十一月

○廿六日丙戌。詔上太上天皇尊号。又皇太后為太皇太后。

〔日本紀略〕天慶九年四月

○四日。太皇太后藤原穩子於昭陽舍崩。年七十焉。

〔日本紀略〕天曆八年正月

藤原安子○廿七日甲辰。策立女御從三位藤原朝臣安子。為皇后。即日。任^(東)宮司。

〔日本紀略〕天德二年十月

○廿九日甲戌。中宮藤原安子崩於主殿寮^(年卅八。皇太子母也。)

〔日本紀略〕康保元年四月⁽¹²⁾

と、「皇太夫人」は天皇の母の称と認められ、また、藤原温子までと、藤原穩子以後とでは名称も異なる。

次に、温子御在所のについて考えてみよう。残念ながら温子が弘徽殿に居住していたという直接的な歴史資料はないが、角田文衛氏・片桐洋一氏・村井康彦氏・工藤重矩氏・日向一雄氏・森本茂氏⁽¹³⁾など、多くの先学が推定されているように、弘徽殿は温子の御在所と考えられよう。となると、伊勢詠歌の惜別の情は、そこで過ごした日々の思いによるもので、伊勢が書き付けた行為は、宇多天皇とのことを内包していても、宇多天皇のみをその対象とはしない。物に書き記しておくという行為についてみると、

(前略) みありくに、ふみをなむゝすびつきたりける。あけてみれば、

世中のあさきせにのみなりゆけばきのふのふぢのはなとこそみれ

とありければ、人くかぎりなくめであはれがりけれど、たがおほむさうしのしたまへるともえしらざりけり。

(『大和物語』六一段)

(前略) 女、いとなしくて、しりにたちてをひゆけど、えをいつかで、清水のある所に伏しにけり。そこなりける岩に、およびの血して書きつけける。

あひ思はで離れぬる人をとゞめかねわが身は今ぞ消えはてぬめると書いて、そこにいたづらになりけり。

(『伊勢物語』二四段)⁽¹⁴⁾

西院の後、御ぐしおろさせ給ひておこなはせ給ひける時、かの院のなかじまの松をけづりてかきつけ侍りける

(素性法師)

おとにきく松がうらしまけふぞ見るむべも心あるあまはすみけり

(『後撰集』・一〇九三)

はじめてかしらおろし侍りける時、ものにかきつけ侍りける

遍昭

たらちめはかかれとてしもむばたまのわがくろかみをなですや有りけん

(『後撰集』・一二四〇)

法師にならむとていける時に、家にかきつけて侍りける

慶滋保胤

うき世をばそむかばけふもそむきなあすもありとはたのむべき身か

(『拾遺集』・一三三〇)

などと、自己の思いを表白するのがこの書き付ける行為である。内裏殿舎からの退出に際して、伊勢の心中に昔日の様々な思いが去来し、その思いを詠出したもので、それは伊勢だけでなく、同じように過して来た皇太夫人温子や他の弘徽殿の居住者達の思いを内包するというまでで、宇多帝のみを対象として詠出されたのではあるまい。「別れるけれど、相思わない宮殿を見ないことが、どうして悲しいのだろうか」と、無情の宮中殿舎との離別は、そこに生活した有情の人々の心に去来するものであろう。だからこそ、『古今集』巻第十九一〇〇〇番歌、

歌めしける時にたてまつるとてよみて、おくにかきつけてたてまつりける

伊勢

山河のおとにのみきくももしきを身をはやながら見るよしもがな

の、「身をはやながら」百敷を「見るよしもがな」と、昔日の状況を再び具現した上で、宮中を見る術を希求するのではないだろうか。こうして、弘徽殿を後にする温子・伊勢・他の女房達の思いを書き付けた歌が伊勢の「わかるれど」の詠歌であらう。それでは、「私一人の身のみにとって（状況が）違っただけなのだよ。皆ひとしく行き戻ってもどうして宮中を見なからうか、きつと見るだろう。」と口語訳した宇多帝の「身ひとつに」の詠歌は、宇多帝のどういう思いの表白であり、かつ「わかるれど」に対するどういう回答なのであろうか。それは、『九曆』の天曆四年（九五〇）六月廿六日の条に見られる次の記事、

重奏云、太上天皇遜位之後、不可一日留禁中、而去天慶九年四月禅位之後、上皇猶御弘徽殿、至七月御出於朱雀院、是則依夏三月南方王相也、又皇后数日不可住人家、而當今太后者、^{（立脱力）}延長元年四月立后、住太政大臣五条家之間、即識、至十月移御主殿寮、是亦雖無慥例、有新議被行云々、以是謂之、當時之定、無殊難歟、若猶可有其難、先造設居處、可被行其事歟、^{（15）}

によって理解されよう。朱雀上皇は「太上天皇遜位之後、不可一日留禁中」と、讓位後はすみやかに宮中を出御しなければならぬ。宇多帝にとっても同様で、そのために『日本紀略』寛平八年（八九六）閏正月二五日の条に、「天皇幸朱雀院。覽諸工造作。」と、讓位以前から後院を準備されていたのである。また、醍醐天皇も『日本紀略』延長八年（九三〇）九月二七日の条に「先帝欲遷坐朱雀院之間。御病甚重。移坐右近衛府大將曹司。」とあって、「太上天皇遜位之後、不可一日留禁中」を守ろうとされていたことが窺われる。そして、皇后は「皇后数日不可住人家」とあって、宮中に居住しなければならぬのである。温子の前後の皇后の御在所を見てみると、

△清和△天安二年 八月廿九日丁巳。（中略）皇太子與^{（明子）}皇太夫人同輿。遷御東宮。

貞觀八年十一月十七日戊午。皇太后還^{（明子）}自東宮。御常寧殿。

〔紀略〕
〔紀略〕

貞觀十年十二月 七日丙寅。天皇曲^(明子)宴皇太后於常寧殿。

〔紀略〕

△光孝△元慶八年 二月 四日乙未。是夜。皇太后出^(唐子)自常寧殿。遷御二条院焉。

〔紀略〕

△宇多△仁和三年十一月十七日丙戌。天皇即^(唐子)位於大極殿。以親母王氏為皇太夫人。申刻。還東宮。

〔紀略〕

寬平三年 七月廿八日乙亥。中宮自東宮御內裏。

〔紀略〕

△醍醐△寬平九年 七月廿六日己亥。天皇御南殿。以先皇皇太夫人班子女王。

〔紀略〕

寬平九年八月 九日壬子。夜。太上天皇并皇太后遷御於東三条院。

〔紀略〕

延長元年 九月 五日丙午。中宮從^(唐子)右大臣五条第。移御主殿寮。

〔紀略〕

延長元年 九月廿一日辛卯。中宮自主殿寮遷御弘徽殿。

〔紀略〕

延長二年 八月廿三日、未時參入、依中宮男君初進御膳、上御弘徽殿、有賜酒・祿、子三剋退出、

〔貞〕

延長三年 八月廿九日、后宮男君初着御袴、上御弘徽殿、々上侍臣賜酒・祿、寅刻退出、

〔貞〕

延長三年十一月 八日、立太子由告柏原・深草・後田邑山陵、東宮還弘徽殿、

〔貞〕

延長四年 七月 十日、甲子、亥剋中宮・東宮遷御弘徽殿、公主・新君等又參入、

〔貞〕

延長四年 八月 卅日、參弘徽殿、依震宮不予也、

〔貞〕

延長八年 八月十三日。中宮東宮遷^(唐子)御宣耀殿。

〔紀略〕

延長八年 九月廿一日。辛巳。皇后遷^(唐子)坐常寧殿。

〔紀略〕

△朱雀△承平二年 六月 廿日辛未。皇太后宮移^(唐子)居飛香舍。

〔紀略〕

天慶元年 八月廿七日戌時遷御綾綺殿、中宮同御、中納言昇殿

〔貞〕

天慶元年十一月 三日。又今日。中宮自弘徽殿。遷御麗景殿云々。蓋遂御在所綾綺殿也。

〔世紀〕

天慶三年 六月 四日亥剋內裏御使來云、中宮重煩給、只今可參入者、乍驚參入、給夜伺候、左大臣同候

〔貞〕

天慶九年 七月 十日戊戌。戌刻。朱雀太上皇太皇太后。出禁中。遷御朱雀院。出禁中假御主殿寮。〔紀略〕

天曆六年 十月十二日小一条記云、今日天皇幸主殿寮、奉問太后御惱、依御心喪之間、無警蹕鈴奏等、〔西宮〕

天曆七年 正月 二日東宮大饗ハ割注、大后去年□□月還□□徽殿、依上皇喪停大饗云々 〔九曆〕

天曆七年 正月 三日、行幸弘徽殿、奉拜太皇太后宮、穩□歟、 〔近衛家文書〕

天曆七年 十月きさいの宮の御方に菊うゑさせ給ひける日、 〔続後撰和歌集一三四六番歌詞書〕

天曆八年 正月 四日、大后於昭陽舍藏、其後移住清涼殿北近廊、 〔西宮〕

と、清和帝の母明子も陽成帝の母高子も、常寧殿に居住している。そして、高子は陽成帝の讓位とともに内裏を退出し、宇多帝の母班子女王も、寛平三年（八九一）の記事のように、内裏に居住する。『日本紀略』の寛平四年（八九二）の記事に、

天皇於常寧殿。奉賀中宮御筈。〔三月十三日条〕

諸公主於常寧殿。供養佛經。奉祈中宮御筈。〔四月二十一日条〕

と常寧殿で六十の賀算の記事があつて、明子や高子が母后として内裏にあつた時、常寧殿を在所とするように、班子女王も宇多帝在位の間は、常寧殿を在所としていたと推測される。そして、宮中に居住していた皇太后班子女王は息子宇多帝の讓位後の内裏退出に伴つて、寛平九年（八九六）八月九日に、宇多帝と共に東三条院に出御されている。かように、母后は夫天皇の讓位以後も息子天皇と共に内裏に留まるものであつたと考えられる。

皇太夫人温子は、醍醐天皇実母藤原胤子が亡くなつた後、養母・継母と認識されていたことが、『日本紀略』の延喜七年六月七日の記事、「皇太夫人藤原朝臣温子崩。年卅六。号三七条皇后。天皇之継母。又養母也。」によつて知られる。よつて、

温子は内裏に帰ることが予測され、それに仕えていた伊勢も、また同僚の女房達も同様に帰るものと思われて然るべきであつたのである。

時代は下るが、『金葉和歌集』巻第九の雑部上に五九三番歌の詞書に、

皇后宮弘徽殿におはしましける比、俊頼にし面のほそどのにて立なから人に物申侍るに、よの更ゆくまゝにくるしかりければ土にゐたりけるを見て、たゞみをしかせばやと女の申ければ、石だゞみしかれて待めると申をきゝてよめる

とある。この皇后宮は、白河院第三皇女令子内親王で、令子内親王は、応徳元年（一〇八四）に三后に准ぜられ、寛治三年（一〇八九）には齋院に卜定され、康和元年（一〇九九）に病によって退下し、嘉承二年（一一〇七）に鳥羽天皇の准母となり、同年十二月一日の鳥羽天皇即位に伴って皇后となられた。温子と同様、鳥羽天皇とは叔母と甥の関係であつて、実母実子の関係ではなく、准母子の関係である。その令子内親王もやはり皇后となつてから後宮殿舎である弘徽殿を在所とする。また、これまで引用してきたのは歴史資料であるが、『源氏物語』にも、「紅葉賀」巻で「七月にぞ后ゐたまふめりし。」と立后した藤壺中宮が、桐壺帝讓位に伴つて、

世の中かはりてのち、よろづもの憂くおぼされ、御身のやむごとなさも添ふにや、軽々しき御忍びありきもつつましうて、ここもかしこも、おぼつかなさの嘆きを重ねたまふ報いにや、なほ我につれなき人の御心を、尽きせずのみおぼし嘆く。今はましてひまなう、ただ人のやうにて添ひおはしますを、今後は心やましうおぼすにや、内裏にのみさぶらひたまへば、立ち並ぶ人なう心やすげなり。

（「葵」¹⁷巻）

と後院に「ただ人のやうにて添ひおはします」ということになつて、弘徽殿の女御が今后と、皇太后となつて母后として内裏におられ、

大后も参りたまはむとするを、中宮のかく添ひおはするに御心置かれて、おぼしやすらふほどに、おどろおどろしさまにもおはしまさで、かくれさせたまひぬ。

御匣殿は、二月に尚侍になりたまひぬ。院の御思ひに、やがて尼になりたまへるかはりなりけり。やむごとなくもてなして、人がらもいとよくおはすれば、あまた参り集りたまふなかにも、すぐれて時めきたまふ。后は、里がちにおはしまいて、参りたまふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿には尚侍の君住みたまふ。

（「賢木葵」巻）

と、皇太后はそのまま弘徽殿に居住されていた。そして、冷泉帝即位以後、

中宮も内裏にぞおはしましける。上は、めづらしき人参りたまふと聞こしめしければ、いとうつくしう御心づかひしておはします。

（「絵合」巻）

と、藤壺中宮は母后として宮中におられる。そして「薄雲」の巻で藤壺中宮は崩御され、「少女」の巻で斎宮女御が立后（秋好中宮）する。それこそ、皇太夫人温子から醍醐天皇の中宮穩子の展開と同じく、母后の存在する後宮から、中宮の後宮へと変容する。かように、皇太夫人は内裏に居住する、これが恒例であったと理解してよいであろう。よって、宇多上皇としては、皇太夫人となった温子であるからこそ、再び宮中、それも弘徽殿に戻ることがあると確信していたのである。それが、「ゆきかへりてもなか見ざらむ」と、反語をもって強く詠出し得る根拠であったのである。しかし、温子は、「寛平九年七月廿六日己亥。従三位藤原朝臣温子爲皇后」。（中略）皇后今夜出内裏」。移御於東五條堀河院」。「紀略」と内裏を出て東五條堀河院に移り、宇多上皇が朱雀院に移御して後、「頼基集に見られる宇多法皇関係諸院とその詠歌年時の推定」にも述べたように、昌泰元年四月二五日、東五條堀河院から朱雀院に移られ、以後、朱雀院を御在所とされていた。朱雀院は、醍醐天皇の朝覲行幸が昌泰二・三年と行われ、多くの詩宴が行なわれていたが、昌泰二年（八九九）十月二四日太上天皇が落髪入道され、仁和寺に居られることが多くなり、醍醐天皇の朝覲行幸が仁和寺に行われるようになって、延喜三年の八月二八日に、東七条宮に移られて、延喜七年六月七日崩御される。ここに挙げた藤原順子・藤原明子・藤原高子・班子女王・藤原穩子とは違って継母であったためか、他に何があったのかは判然としないが、温子は宮中には戻られなかった。

「身ひとつに」の宇多詠歌の解釈に様々なものが提示されたのも、これまで述べて来た宇多上皇詠が内包する、弘徽殿の人々に対する慰撫が理解されなくなったからではないだろうか。後の歴史が記す如く、事実上は温子が宮中に再び戻ることは無かった。宇多上皇の思いと、温子が再び醍醐後宮には戻らなかったこのずれこそが隠された歌語りではないか。

以上の解釈が許されるならば、塚原氏が「動詞『ゆきかへる』の表現するのは、往復とか往還とかいった概念である。し

かるに、動詞『ゆきめぐる』が表現するのは、周行とか巡行とかいった概念である。」と説かれるように、歌詞からすれば、『大和物語』尊経閣蔵為家本・蓬左文庫蔵為衆筆本・天理大学図書館蔵御巫氏旧蔵本・鈴鹿三七氏旧蔵本・大東急記念文庫蔵本や『伊勢集』の「ゆきかへりてもなどか見ざらむ」が原形本文と認定されるものであらう。

(注)

- (1) 『大和物語の注釈と研究』武蔵野書院・昭和五十六年二月七頁。
- (2) 雨海博洋編著『大和物語』桜楓社・昭和五十八年三月（底本尊経閣蔵為家本）による。
- (3) 以下の歌集は全て『新編国歌大観』角川書店による。
- (4) 『大和物語の注釈と研究』武蔵野書院・昭和五十六年二月八頁。
- (5) 『大和物語と和歌二首―位相語彙の史的変移―』『文学史研究』第二十三号・昭和四十七年七月。
- (6) 『大和物語初段の解釈』工藤重矩『中古文学』第三十号・昭和五十七年一〇月。
- (7) 『異伝の派生と収束―大和物語』初段贈答歌への試み(上)―『佐賀大國文』二二・平成五年一一月。
- (8) 1 大和物語鈔。2 大和物語抄(北村季吟)。3 大和物語直解(賀茂真淵)。4 大和物語虚静抄(木崎雅興)。5 冠注大和物語(井上文雄)。6 以上、『大和物語諸注集成』雨海博洋編著・桜楓社・昭和五十八年五月。7 『日本古典文学大系』(阿部俊子・今井源衛校注・岩波書店・昭和三十一年一〇月)。8 『日本古典文学大系』(南波浩・朝日新聞社・昭和三十六年一〇月)。9 『日本古典文学全集』(高橋正治・小学館・昭和四十七年二月)。10 『鑑賞日本古典文学』(片桐洋一・角川書店・昭和五〇年一一月)。11 『大和物語の注釈と研究』(柿本奨・武蔵野書院・昭和五十六年二月)。12 大和物語初段の解釈(工藤重矩『中古文学』第三十号昭和五十七年一〇月)。13 大和物語解釈の問題点(1)―身ひとつにあらぬばかりを―第一段―(雨海博洋『解釈』二四卷六号・昭和五三年六月)。14 『身ひとつにあらぬばかりを』の解―大和物語第一段―(森本茂・平成三年一〇月一六二頁)。15 伊勢詠歌解釈『有精堂校注叢書』昭和六三年三月)。16 『身ひとつにあらぬばかりを』の解―大和物語第一段―(森本茂『解釈』二八卷八号・昭和五十七年八月)。17 大和物語の考証的研究(和泉書院・平成二年一〇月二二五頁)。18 『大和物語全釈』大学堂書店・平成五年一二月)。
- (9) 『大和物語初段の解釈』工藤重矩『中古文学』第三十号・昭和五十七年一〇月二四頁。
- (10) 『身ひとつにあらぬばかりを寸感』『解釈』二八卷一一号・昭和五十七年一一月五八頁。
- (11) 『群書類従』三輯・卷第三十三・統群書類従完成会・昭和五十五年四月三〇一頁。
- (12) 『文徳実録』・『三代実録』・『日本紀略』は『新編国史大系』吉川弘文館による。以下同。
- (13) 『日本の後宮』学燈社・昭和四十八年五月九七頁。『鑑賞日本古典文学』角川書店・昭和五〇年一一月二五八頁。『国文学』二五―十三「後宮のすべて」昭和五五年一〇月八八頁。『中古文学』第三十号「大和物語初段の解釈」昭和五十七年一〇月二八頁。『平安時代の文学と生活』平安貴族の環境』至文堂・平成三年一一月一二二頁。『大和物語全釈』・大学堂書店・平成五年一二月三二頁。
- (14) 新日本古典文学大系『竹取物語伊勢物語』秋山虔校注・岩波書店・平成九年一月一〇七頁。
- (15) 『大日本古記録』岩波書店・昭和三十三年三月一九四頁。
- (16) 『紀略』『日本紀略』・『世紀』『本朝世紀』・『略記』『扶桑略記』、以上『新編国史大系』。『貞』『貞信公記』・『九曆』『九曆』、以上『大日本古記録』。

〔西宮〕『西宮記』『新訂増補故實叢書』。〔近衛家文書〕『大日本史料』第一編之九による。

(17) 新潮日本古典集成『源氏物語』石田穰二・清水好子校注・新潮出版・昭和五十二年七月、二卷六五頁・一四〇頁・一四四頁、三卷九七頁。

(18) 『大中臣頼基集全注釈』新典社・平成三年一二月。

〔付記〕 本稿は平成九年九月二十八日藤女子大学で開催された和歌文学会第四十三回大会において口頭発表したものを基としたものである。席上ご教示を賜わった平野由紀子氏に感謝申し上げます。